

文化

新しい時代の新しい博物館

「みんなの今とこれから」

新

な
ら

民俗通信

14 茶谷まりえ



黒電話の体験

奈良県立民俗博物館(みんぱく)では、今年3月に常設展示を一新しました。その経緯と工夫については、本紙1月2日付の通信9で、当館の溝邊悠介学芸員が紹介しましたが、本稿では再開館から半年を経た今のみんぱくの取り組みと、その時間の中で私たちが考えてきたこと、感じたことを書き留めたいと思います。

▼生まれ変わる時を迎えて
みんなは1974(昭和49)年に開館して以来、50年近くが経過しました。
▲生まれ変わる時を迎えて
みんなは1974(昭和49)年に開館して以来、50年近くが経過しました。



茶谷 真理え

あるものではなくなります。加えて、老朽化した設備や器材、不十分な解説パネルは大きな課題でした。

結果として、耐震のための補強壁が入った分だけ展示構成の見直しの中でヒントになったのが、来館者特に年間70校ほどの利用がある、小学校の先生や子どもたちの声でした。子どもたちにとって、みんなの展示資料は、もはや

「大昔」のもので、若い生徒たちにとってもなじみの耐震補強工事を行うことになつたのです。

▼"体験"から"体感"

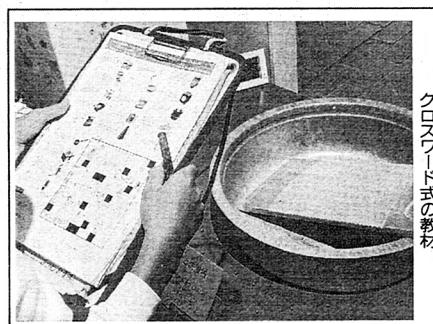
人気の高いプログラムです。また、そういった取り組みの中での参加者のやりとりは、私たちにとって大きな原動力になっています。

耐震補強工事による休館を経て再開館した後も、新型コロナウイルスの影響を受けて、前述のような催し物では、不思議などと以前に来館されたことに、以前に来館されたことのある方々からも、明るい感想を多数いたぐようにありました。

黒電話の事例と併せて言えることは、遊びの中で自然と得られる学び、そして知識そのものよりも、知識に出逢った瞬間の感動や楽しさを求められているところです。おそらくこれはコロナ禍の娛樂不足による過剰性のものではなく、今の、そしてこれからの中でも抜群の人気をもたらす一つだだけに、来館者との繋つながりを絶たれたような淋しさ(さびしさ)を味わいました。

その間、季節の行事や普段の道真にまつわる工作などを紹介するデジタルコンテンツの配信にも尽力しました。これまで黒電話が「昔の工夫には限界があります。表情や声の変化を感じながら会話をできること

教材を導入します。すると、子どもたちの関心が以前とは比べ物にならないほど高まり、夢中で取り組む姿が見られるようになりました。



クロスワード式の教材

せんが、訪れた人にいろいろなことを知つてもらいたい、楽しんでもらいたいという想いが、今のみんなを支えています。

▼葛藤と摸索の日々
みんなは、数年前から「昔の暮らし体験」として、本物の道具や園内の古民家を活用したさまざまな体験学習・ワークショップを開催していました。特に、かまど御飯や炭火アーロン、七輪などの体験は

遊びで得られる学び

本物にふれるところへの二度を強く感じていたタイミングだっただけに、来館者との繋つながりを絶たれたような淋しさ(さびしさ)を味わいました。

その間、季節の行事や普段の道真にまつわる工作などを紹介するデジタルコンテンツの配信にも尽力しました。これまで黒電話が「昔の工夫には限界があります。表情や声の変化を感じながら会話をできること

もう一つ、教材に関する例を挙げたいと思います。以前のみんぱくでは書き込み式・一問一答式のワークシートが主流でしたが、今からクロスワード式の